
いつかの約束

ヤーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかの約束

【コード】

N6083I

【作者名】

ヤーク

【あらすじ】

高校一年の俺は11月の公園で友達の帰りを待っていた。するとまさかの昔の女友達が現れ……。

一 出会い

「今日もいい天気だな〜！」

と友達の智也が言う。ホントに今日もいい天気だ。なんてったって秋なんだからな。心地の良い日に決まってるじゃないか。と思う俊哉と智也は街の大通りを歩いてた。

なんか変わらないな、この街は。と言おうとしたとき智也が「この街はかわんねえなホント。」

俺が言おうとしたのにな。同じことを言いやがった。

そんなことを思っていると、いつもの公園に着く。いつもの公園とはいっても帰りに寄る公園なのだが、今日は土曜日だ。土曜日は学校は休みなので今日は智也と散歩中。最近遊んでてもすることが無いのでね。

ちよくちよく出てくる智也は俺の友達。中学1年の頃からの友達だ。今は高1だから友達になって4年目か。高校も同じだし退屈はしない。やっぱり気が合うのかな。

公園でいつもの同じベンチでいつもみたいに他愛も無い学校の話。俺は部活をやっていないが智也はバスケットをやっている。なのでクラスの話が主である。あいつがどうだとかどんなやつが好きだとか、クラスでタイプの奴はいるのだとか。

まあ決まって智也は「恵子^{ケイコ}」のことを話し出す。恵子はクラスのマドンナ。クラスで1番可愛い。もしかしたら学年でもかもしれない。そりゃ可愛いもん。俺だつてそう思うし……。でも俺には子供のときから好きな奴が……。ダメ！なんで俺こんなこと考えてんだクソ……。

「なんか喉渴いたな。なんか買ってくるわ。お前はお茶で良いよな。」

「おう。あんがとさん！」

やっぱあいつはいい奴だな。え？なんでお茶なんだって？俺は日本人だぞ！日本人はお茶に限るでしょ！

このへんは自動販売機がないからコンビニしかない。コンビニって言っても行くのにも10分はかかるしな。この時間が暇なんだよな。

そんなことを思っているとクラスの恵子だ。お、私服じゃん。私服も可愛いんだな。まあ顔が良いから何でも似合うのか。

恵子はこちらに気づいたみたいだ。

「あ！俊哉君じゃん！どしたのこんなところで。」

恵子はこちらに近づいてきている。俺は隠キヤラでは無いので女子ともしやべったりするし恵子とは仲がいい。

「おお、恵子じゃん。なにしてたんだこんなところで。それも一人かよ！こんな土曜日は彼氏とでも過ごせつての！」

俺は女子に何を言ってるんだ……。

「いいじゃんべつに〜！それにさ、彼氏なんかいないもん！じゃあ俊哉君が彼氏になってよ。」

「え……。」

俺は耳を疑った。恵子ってこんな事いうやつだったか？

「嘘よ嘘！いきなりそんなこと言うわけないでしょ！漫画を買いに行くのよ。」

だよな。ホントにビックリした。なんの冗談かと思った。

「漫画か。漫画ってなんの漫画だよ。」

「最近ハマってるのはこれ！「ジャズマン！」。これ面白いんだから！」

「ジャズマン！」とは、最近「ステップ」と言う週刊で掲載されている漫画だ。なんかクラスでも好きな奴が多いみたいだ。俺は「ステップ」は買わないし読んだことは無いが今度読んでみるかな。

「ああ、「ジャズマン！」か。俺それ読んだこと無いんだ。なあ、

また今度かしてくれよ。」

「うん。いいよ。へへっ！貸し一個作っちゃお。」

「貸しって何だよ。まあ良いけどさ。またお前んち行くわ。」

「うんじゃあ私もう行くね！急いでるんだ。買いにいっいたら次は塾の宿題しなきゃ。じゃあね。」

恵子は走って行ってしまった。あゝあ。ここに智也がいたらなあ。あいつ恵子のこと好きだからな。あ、でもあいつ急いでるって言うてたっけか？まあどうせ無理だったか。

それにしても遅い。何してんだあいつ。まあ俺はこんな土曜日悪くないけどさ。

はあ……。なんか空って自由で良いよなあ。俺も空になりてえよお……。

そんなことを考えてあげていた顔を元の位置に戻した。また知ってるような顔の女子がいるぞ？ん？あれはまさか……。いや！でもそんなはずは無い。あいつは引越しまったんだから。でもどうしてこんなところに……。！

その知ってるような女子とは俺の子供の頃（って言ってもホントに小さい頃からの友達）に好きだった奈央だ。ホントになんでこんなところにいるんだ？！

奈央は俺に気づいたのかこちらを見ている。しかも眼を細めて。そっういやあいつは目が悪かったよな。

そしてこっちに近づいてきている。俺と奈央との距離が10メートルになったときに向こうは気づいたようだ。

「ねえ。もしかしてさ、君俊哉君……。だよな？」

奈央が言う。

「うん。お前は奈央だよな……？」

「うん！やっぱり俊哉君だったんだね！ホント変わってないよね外見は！」

「余計なお世話だったの！……お前は相変わらず可愛いな……」

ホントに可愛い。俺は昔こいつのことが好きだったんだな。今もその気持ちは変わらないが……。

「やめてよ恥ずかしい。俊哉君もかつこいいよ！」

「お世辞は良いよ。でさ、お前なんでこんなところにいるんだ？
そうだ俺！ナイス質問！」

「えへへ。私今年からまたここに住むことになったんだ！引越してきたの。」

ななななな、何だつて~~~~~!!!!!!!!!!!!

ほんとかよそれ！いったいどうなってんだ？

「マジかよ！どうして？」

「なんかさ、家の都合でこうなっちゃってね。まあこの辺一帯は住んでたこともあるし友達も出来やすいしね！」

「まあそうだけどさ。よかったじゃん！じゃあ俺が友達第1号にでもなつてやるか！」

と冗談交じりに言ってみる。

「ホント？うれしいな！じゃあ改めて……よろしく」

奈央の笑顔。ホントに久しぶりだ。

「おう！任せとけよ！俺の周りにいちゃあ怖いもの無しさ！ハハハハハハ。」

今日の俺はなんだかテンションがおかしい。いや、今日じゃない。

奈央と会ってから俺のテンションはおかしくなり始めている！こんな俺でもアがるんだな……。

「でさ、ここに住むってんなら高校はどこへ行くんだよ。」

ちなみに俺と智也の行っている高校は「大庄高校」である。そこは一般的な公立高校で偏差値で言つとそこらへんの高校より少し高い。

「高校は「大庄高校」だよ！なんか「大庄高校」は評判が良いからね。」

マジかよ一緒じゃねえか……。なんか緊張してきたぞ……。

「俊哉君はどここの高校なの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」 「大庄高校」・・・・・・・・

「え〜〜〜〜！！！！俊哉君もなの？意外だね。俊哉君があとこ入れたんだ。」

「あー！バカにしたな！言っとくけど俺は中3のときに頑張ったからもうバカじゃないぞ！」

確か奈央は俺よりも数段頭が良い。昔は成績が何にも勝てなかったっけ・・・・・・・・。

「え〜〜？ホントかな？（笑）」

「ホントだよ！まあ同じクラスだったらしいのにな。」

「そうだね。私、俊哉君と同じクラスがいい！」

俺もそうだったの。

そんなこんなで話をしていると智也が帰ってきた。

「おい、何してたんだよ！お前遅すぎるぞこの！」

「あ〜〜ごめんごめん！帰りに恵子と会ってさ。話したら長くなっちゃった。」

「ああ、恵子急いでるって言ってなかったか？」

「ああ、言ってたな。何でお前知ってたんだ？」

「さっきここでお前を待ってたらまたま会ってさ。」

「へ〜。そうなのか。でさ、そこにいる可愛い女の子は誰だ？もしかしてお前の彼女か？！このヤロウ！！」

つち。智也に見られちゃったか。絶対冷やかされると思ったよ。

「ちげえよ！そんなんじゃねえって。こいつは俺の幼馴染の奈央だよ。何回か話しただろ？」

「おお！この娘がああ噂の奈央ちゃんね！やっぱ聞いてる通り可愛いんだな。」

「やめてくださいよ〜。はじめまして！奈央です。よろしくお願ひします。」

「よろしく！俺は俊哉の友達、って言うか親友かな？の智也です。」

よろしくね。」

智也は女慣れしているのかなんか女子と仲良くなるのがうまいよな。俺にもその技術くれ！

そんなこんなで話をしていると少し肌寒くなってきたかな？夕方の5時半だしちょっと涼しくなってきた。秋だしこんな時間は寒いんだ。

「なあ、寒くなってきたしさ、俺んちいかねえか？奈央も知ってるだろ？」

俺が提案する。

「うん！私俊哉君の家好きだったからね」 行こうよ！」

「おう！俺もトシの家好きだぜ！行こうぜ！」

俺の提案が実行される。俺んちで何を話そうか。

二 誰もいない夜

俺んちについた。俺んちはマンションだ。俺は一人暮らしである。なぜ一人暮らしなのかというと、俺は高校に行くときに一人暮らしを両親に言ってみた。最初は猛反対していたが俺の気持ちに負けたのか、渋々承諾してくれた。お金は講座に振り込んでくれている。一人暮らしはいろいろ快適だ。友達をいつでも呼べるし。新鮮である。

「え？俊哉君ここに引越してたの？」

そういえば奈央には言っていなかったっけな。

ああ。俺は一人暮らしをさせてもらって……と言おうとしたとき、

「ああ、こいつは今一人暮らししてんだぜ！」

と智也が言った。いつも俺の言おうとしたことを言っちゃまうんだな。

「え〜！何で一人暮らしなんかしてるの？」

「まあそれは追々話すよ。まあとりあえずあがんなよ。」

このマンションは4階建てで俺んちは2階だ。1階は不用心だからということと2階ならokと両親も承諾してくれたのだ。

部屋も一人暮らしにしては大きいほうだし、学校からも近い。立地条件的には申し分ない。

「へ〜。ここが俊哉君の新しい家なんだね〜。なんか羨ましいな。」

「俺も羨ましいよ全く。一人暮らししてえ。」

奈央と智也が口をそろえて言う。

一人暮らしは俺が志願したんだが、こんなにもつらいことなんだとは知らなかった。自炊はしないといけないし、掃除もしなくちゃいけない。母親の偉大さが一人暮らしをしてわかった。

「今日は土曜日だ！俺は今日泊まってくぜ〜。」

智也が勝手なことを言い出す。まあいつものことだが。

「え〜。智也君泊まっていくんだ〜。私も泊まるのかな．．．．．
なんてね。」

ビックリした。ホントに泊まっていくかと思ったぞ！まあそれでもいいけど．．．．．って何考えてんだ！俺は最低な奴だな．．．．．
「奈央ちゃん、今日はトシと奈央ちゃんが久々に会った日だ！今日は飯でも食っていきなよ。お〜〜いトシ！今日ピザ取るうぜ！」
また勝手なことを．．．．．！まあでもいいか。金ならまだ適当に使える範囲内だ。

「奈央、そうしろよ。まだしゃべりたいこともあるしな。お前の母さんには連絡したら大丈夫だろ。」

「うん！わかった。今日は楽しんでゃお〜つと！」
奈央は快く承諾した。こういうところも昔とかわんないなホント。

そして奈央と俺と智也はいろいろなことを話した。学校のこと。奈央の引越したところのこと。引越したところでの友達のこと。いろいろなことを話した。

楽しいときの時間はすぐすぎちまうんだな。気づけばもう11時である。

「あ、もう11時じゃん。そろそろ帰らないと．．．！智也君も寝てるしね〜。」

あ！いつの間に寝てたんだこいつ。まあ仕方ないか。

「んじゃ俺送っていくよ。こんな時間に一人は危ないからな」

「ありがと！昔と変わらず優しいね。」

俺たちは歩く。暗い夜の道を。俺の家のマンションは街とは上のほうにあるからこの時間になると人通りもほとんど無くなる。今いるのは俺と奈央の二人だけ。なんかそれだけでも緊張するな．．．．！
なんか無言だ。会話が続かない。

無言に耐え切れなくなった俺はいつの間にか口を開いていた。

「なあ奈央、お前向こうで彼氏とかできたのか？」

「え……？何よ突然……。」

奈央は驚いたような顔をしている。そりゃそうだよな。俺だってこんな事聞かれたらそんな顔になるよ。

「いやさ、お前みたいに可愛かったら彼氏の一人や二人いるだろ。」

「そんなこと無いって。告白とかもそんなにされなかつたし。」

なんか意外だな。俺はてつきり告白のオンパレードだと思っていたのだが。

「俊哉君は彼女とかいるの？」

「いるわけ無いだろ。この性格だぞ。出来るほうがおかしい。」

自分で言ってる悔しいが俺は自分のことをいいやつだなんて思っていない。もつと出来た人間だっているしこんな奴に彼女が出来ないとあきらめてもいるからな。

「そんなこと無いよ。みんな本当の俊哉君を知らないんだよきつと。」

私は俊哉君が優しくて思いやりのある男の子って事知ってるよ？

「そんな事言ってくれる女子はお前くらいのもんだよな。ホントにありがと。」

「……………」

「……………」

「……………」

その後、沈黙が続く。

そついや奈央と俺は昔両想いだったんだ。奈央は今の俺のことをどう思っているんだろうか……………。

そのとき奈央が口を開いた。

「あ、私家ここに引越したんだ。またなんかあったら誘ってね！じゃあまた。」

おい俺。ここで奈央を帰してしまっただけ良いのか？まだ話したいことがあつたんじゃないのか？俺！

「奈央、ちよつと待ってくれ……………」

「ん？どしたの？」

「俺さ……、今でもお前のこと忘れられねえんだ……。だからその……俺と付き合ってく……。。」
そこまで言ったとき、奈央が俺の発言を制止するように唇を人差し指で押さえた。

「俊哉君。私も忘れる事出来なかったよ。でも今は久しぶりに会ったところだしもうちよっと話そうよ。私だつて変わっちゃったし俊哉君も変わった。まだまだ俊哉君の事知りたいよ。」

そりゃそうか。人は年月で変わってしまう。俺は奈央のことが好きだ。その気持ちは昔から変わらない。でももしかしたら奈央は他の男が好きなのかもしれない。

俺は急ぎすぎたようだ。なんだか恥ずかしいな……。

「そうだよな……。ごめん。気が早かったよ。またいつでも話そう。学校も同じなんだしな。」

「うん。じゃあまた学校でね！」

奈央は家に入っていった。クソ……。俺はなんて恥ずかしいことを言ってるんだ。俺はそう思いながら来た道を引き返した。誰もいないような真つ暗な道を……。

三 いつもの朝

月曜日だ。

月曜日は学校がある。学校は面白くない。みんなそう思っているだろう。

学校なんか毎日おんなじことの繰り返しだ。いつもつまんなく、社会に出てもためになるかならないかわからないような勉強をやるだけの学校。本当にやる意味があるのか。いつもそう思う。

「オハヨー。」

「おう。」

智也が話しかけてくる。いつものことだな。

あ、そういえば今日から奈央が学校に来るのか。普通は今日から登校してくるもんな。

「そついや奈央、今日から学校登校してくるはずだぞ。」
俺が言う。

「マジかよ！同じ学校だったんだな！へ〜、制服の奈央ちゃんが見れんのか〜……。」

「おいおいなんて顔してんだ。お前には恵子がいるんじゃないのか？」

ホントにどんな顔してんだ。ヨダレまで垂らしやがって。

「恵子は可愛いけど、奈央ちゃんもな〜。」

「ちよつと〜。誰なのよ奈央って。」

この声は恵子か。恵子はニヤニヤ。

「あああああああ！いやいや！なんでもないよ！」

智也はあわてている。そりゃそうだよな。好きな子に疑われちゃうもんな。

「いいわよ、隠そうとしなくて〜。どんな子よ。」

「だからなんでもないって言ってんだろ〜〜！」

智也は走って逃げて行ってしまった。あいつも恥ずかしがるのか。初めて見たな。

「俊哉君、おはよう」

恵子が言う。恵子は朝でも夜でもいつでも元気が良いんだな。なんだからこっちも元気になってくる。

「オハヨ！朝から元気だな。俺も元気になってくるわ！」

「えへへ。そうかな？」

恵子は照れながら言う。可愛い。学年一の美少女の照れ笑いはものすごく可愛い。見ていて飽きないものだ。

「そろそろ行こうぜ。ベル鳴っちまうぞ。」

「そだね。そろそろいこっか。」

俺たちは自分の教室に歩き出した。

四 転校生

「キーンコーンカーンコーン」

ベルが鳴った。俺たちは急いで教室に入る。

「はい。二人とも遅刻だなおい！」

智也が冷やかしてくる。

「うるせえ！先生がいなけりゃ遅刻にならねえんだよ！」

俺が反論する。幸い先生はまだ来てない様子だ。そっぴや奈央はこのクラスなんだろうか。

「はい、着席しろお。」

俺のクラス、「1年4組」の担任の野村健也ノムラケンヤだ。みんなからは「ケンボウ」と呼ばれている。

「はい、座れ座れ。座らないとSHRできねえだろ。」

みんなが着席し始める。俺も自分の席に座る。

「みんな座ったな。じゃあSHRはじめるぞ」。の前に、転校生を紹介しちゃう。

みんながざわざわし始める。へこのクラスなんだな奈央は。智也も知ってるし周りの奴らに言っている。どうせ「俺この転校生知ってるぜ！めっちゃ可愛いんだよ！」とか言ってるに決まってる。

「おい、入ってきなさい。」

ケンボウの声だ。扉がガラガラ〜と開いた。

「はじめまして！ 高校から転校してきました。菊野奈央と言います。よろしくお願いします！」

ほら、やっぱり奈央だ。制服姿の奈央はものすごく可愛い。山本恵子ぐらい。いやそれ以上に……。長い髪が制服に似合っている。

（すげー可愛いじゃん……。）（すっげー好みだわ……。）って声が聞こえてくる。基本的には男子の声である。

男子のはもちろん人気はあるのだが、可愛すぎると女子に嫌われることがちよくちよくある。まあ奈央に限っては大丈夫か……。

1時限目が終わるとみんな奈央の周りに集まる。奈央は誰とでも仲良くなれる奴である。昔からそういう奴だったからな。

2時限目が終わった後にはもうみんなと普通に話をしていた。俺はそういうのがすぐには出来ないタイプなのでみんなと打ち解けるまで時間がかかる。

昼休み。みんなが昼飯を食い始める。俺はいつも智也と二人で校舎の屋上で食べている。あそこはあんまり人が来ないから。それに眺めもいい。

いつもどおり購買でパンやら飲み物を買って智也を誘った。すると智也は奈央を誘っていた。

「おいトシ。奈央ちゃん誘ったけど良いよな？」

駄目なわけ無いだろ。むしろ大歓迎だつての！

「もちろん！じゃあ行くか。」

「うん！」奈央が元気よく言う。

「へ」。この学校って屋上にも行けるんだね。なんか気持ちいい！」

奈央は背伸びをしている。風で髪がなびいている。今日は風が強いな。

みんなで昼飯を食べる。俺は購買で買った「クリームパイ」と「ホットドッグ」と「アイスココア」、智也は「あんパン」と「メロンパン」と「アップルパイ」と「ホットドッグ」と・・・おい、お前どんだけ買ってんだよ！合計で6個も買ってんじゃないか。昼にそんなに食えるのかよ。

奈央は自分で作った手作り弁当だ。普通にウマそうじゃん。

「奈央ちゃんって料理も出来るんだね。いいお嫁になれるじゃない！」

智也が言う。奈央は照れている。

「やめてよ」。結構この年で料理できるのなんて普通だよお。」

まあこの年で料理できる娘は多いよな。でもこんなにうまく作れるのはなかなかいないんじゃないか？卵焼きだって完璧だし栄養バランスも整っている。ホントにいい嫁にいけるんじゃないか？

そんなこんな言っている内にみんな食い終わっていた。

「ごちそうさま〜！」

奈央が食べ終わったようだ。

「はあ……食った食った〜。」

「お前は食い過ぎだ。」

昼にパン6個も食ってんだぞ。食い過ぎだったの。

「ホントにいっぱい食べたよね〜。気持ちいいくらい！」

確かにそうだな。俺がこのパンを作っている人ならこんなに嬉しいことは無いだろう。

「腹が減って仕方なかったからさ！」

「まあそれくらい食うか……。」

「私はちっちゃいお弁当で十分だよ〜。」

女子はそのぐらいだろう。いっぱい食ってる奈央なんかみたくないぞ…。

「そついや次授業なんだ？」

智也が口を開く。

次の授業か……。なんだつたつけな。

「次は国語。野村先生の授業だよ！」

奈央が答えた。俺より先に答えるとは…。一本取られたぜ。

俺のクラスの担任、野村健也先生は国語を受け持っている。俺は国語が苦手だ。先生は好きなのだが、古典とか漢文とかもう訳がわからなくなってくる。智也も同じだそうだ。

「奈央ちゃんすげーじゃん！俺らより覚えてるとか。」

智也が奈央を褒める。

「まあ初めての授業だからね。覚えておかないと！」

奈央が答える。

まあそんなもんか。俺も最初の頃は月から金までの授業は全部覚えてたからな。今は置き勉強だし関係ないけれど。

「そろそろ帰る。寒いし。」

俺はそういうと階段の方へ向かう。

「ちょっと待てよ。」

「待ってよ俊哉君。」

智也と奈央もついてくる。

さあ、昼からも睡眠学習でもするかな！！

五 下校

五時間目の国語。六時間目の化学。なんにも話を聞いていない。理由は”睡眠学習”をしていたからである。

なぜ睡眠学習をしていたのかというと、昨日の夜にさかのぼるが、ずっとDVDをみていたのだ。DVDは推理物でなかなかやめられなかった。逆にやめてしまうと気になって寝れない。あれはみるしかなかったのだ。

五、六時間目に睡眠学習をしていたのでもう眠気も無くなり逆に元気である。

ケンボウのSHRも終わり下校だ。みんな帰りの支度をしている。俺も同じようにかばんに筆箱だけを入れ下校。

そうだ、奈央を誘おう。ととっさに思った俺は教室を見渡す。奈央は帰る支度をしているようだ。

「おい奈央。一緒に帰ろうぜ。」

奈央はいきなり声をかけられてビックリしている。

「俊哉君か……。いいよ別に！」

「別についてなんだ別について！」

そんな会話をしている中、クラスの奴らは（あいつら付き合っているのか？）とか（まじかよ。トシに取られてんのかよ）。こりゃ無理だな。（などの声が上がっている。

まあそんなことは無いのだが、気分は悪くない。むしろ良いほうかもしれない。

「じゃあ行くぞ。」

「待ってよ。」

奈央は走ってついてきた。

「学校には慣れたか？」

まだ学校に行って1日目の奈央に言う言葉か？

「まだよ。まだ1日目よ？そんなもんでしょ。」
「やっぱりそうだよな。俺だってそうだし。」

「まあ俺とか智也がいるからそのへんは気にすんな。」

「全然気にしてない！クラスのみんな優しいそうだしね。」
「全然気にしてないってな……。なかなかグサツとくる言葉だ。」

そんなことを話しているうちに、奈央の家に着いた。奈央の家は一軒家だ。この前引っ越してきたばかりなので庭のあちらこちらにダンボールが置いてある。

「おくつてくれてありがとう！また明日、学校でね。」

「おい、ちよつと待て。」

俺が引き止める。

「どしたの？」

「メルアド交換しないか？」

俺らはまだ交換してなかった。聞くタイミングも逃していたし、いつ聞いて良いかもわからなかったから。このタイミングで聞くしかなかったのだ。

「いいよ。はい……。送信完了！じゃあね！」

奈央が家に入ってしまった。俺はそんな奈央を見送ると奈央にメールを送る。

件名：俊哉。よろしく。

本文：これからクラスも同じだしいい思い出作ろうぜ。

いつでも暇な時メールして来い。俺が相手になってやる！

P.S：智也にも教えてもいいか？

こんな文面を送った。するとすぐにメールが来た。

件名：こちらこそよろしく。

本文：明日も学校頑張ろうね！

思いでもたくさん作ろう

智也君にも教えておいてね！

メール返すの早いな・・・そう思いながら俺は家に帰ったのである。紅葉で赤くなったもみじの落ち葉を見ながら。

六 放課後の誘い

金曜日の放課後。

「なあ、明日どっか遊びに行かないか？俺部活休みなんだよ。」
智也が俺に言ってきた。

「ん、ああ。いいんじゃないかねえの？俺も暇だし。」

「んじゃあ決まり！二人で行っても暇だしさ、お前奈央ちゃん誘つとけ。俺は恵子誘う。」

「はあ？なんで俺が誘うんだよ。てか恵子も行くのかよ。」

「とにかくどこにするのか決めようか。」

俺はするする引きずるのは嫌なのだ。行くなら予定をさっさと決めたい。

「じゃあ遊園地なんてどうだ？」

遊園地か……。最近行ってないなあ。久々に行くと面白そうだな！

「よし！決まったな。俺は奈央を誘つとくよ。」

「んじゃあ俺は恵子ね。」
そっぴいなながら智也は走り去っていった。部活だろうな……。

じゃあ俺は奈央を誘うか。なんか緊張するなあ。そっぴいえばこれって……。ダブルデート？？いや！違う。まだカッブルでもないんだからな！

でも俺は奈央を好きで智也は恵子が好き……。ダブルデートなのか？？

メール

件名：俊哉。明日

本文：明日あいてるか？

あいてたら明日俺と智也と恵子で遊園地へ行くんだが行かないか？

恵子って知ってるよな。あの俺のクラスの目立つ子。
じゃあ返信待ってるぞ。

これを奈央に送信。奈央はすぐにメールを返してきた。

件名：no title

本文：いいよ！行こう！

遊園地なんて久しぶりだね！

恵子ちゃんなら知ってるよ！もう友達だし！

明日が楽しみ！^o^

今俺は何気なく奈央にメールを送ったが、正直かなり勇気のある行動である。と今知った。いつの間にか手に汗をかいていたのである。俺はそんな事に気付かず、メールを送っていたのである。自分でもわからないが緊張していたわりにはちゃんと文面が出来てるな。と感心した。

よし！気合を入れる俺！明日はダブルデー・・・じゃない！遊園地遊びに行くんだ。俺も楽しみになってきた！

七 遅刻

ふああ……。眠い。今の時刻は……。八時……。八時
??? 駄目だ！遅刻じゃないか！

俺は急いで支度をする。なぜこんな事になっているかという昨日
にさかのぼる。

From: 智也

件名: no title

本文: 明日の遊園地の件なんだが、明日は八時半に駅前集合。

遅れんじやないぞ！お前は遅刻癖があるからな。

それと飯は向こうで食うから金は持って来いよ！

P.S: 遅刻したらソフトクリーム全員分おくれ！

こんなメールが昨日の夜の八時に届いた。

明日は八時半に行かなきゃならないのか。ということは、俺は七時
には起きてないとな。

などと考えていた。時間を教える為、奈央にメールを打つ。

件名: 明日の件について

本文: 明日は八時半に駅前集合だから。

遅れんなよ！

俺は遅れないから安心しろ！b

ちなみに明日は向こうで飯食うから。金持ってくんの忘れん
なよ。

このような文面を送る。てか俺の文章、全く面白みを感じられない。
もっと面白くなるように考えて打たなければならぬ。そんなこ

とを思っているメールが来た。
奈央かな？にしては早くないか？

From: 恵子

件名: 明日よろしく!

本文: 明日、私なんかを連れてつてくれてありがとうね!

奈央ちゃんとも友達だから楽しみだな。

明日はいい思い出作るぞ!

奈央ではなく恵子だった。奈央の文章はなんとなくだが男っぽい印象を受ける。あいつは喋ってても、男友達と喋っている感覚になる。これは女子に受ける印象なのだろうか？
俺は恵子に返信する。

件名: おう! 明日待ってる!

本文: お前が居たほうが良いし楽しいだろ!

んじゃまた明日な。

俺の文章がまた面白くない。どうすればいいのだろう。
そして数分後、奈央からの返信。

From: 奈央

件名: no title

本文: 八時半ね! りょうかーい! (^ ^)

ご飯代も持っていく!

やっぱり俊哉君におごってもらおうかな。・・・なんてね

じゃあまた明日!

こんなやり取り夢のようだ。好きな子とメールをするのってそれだけで楽しいものなのだという事を再認識させられた。

そんなやり取りをした後、俺は風呂に入りすぐに就寝した。はずなのに、ちゃんと目覚まし時計も七時にセットしたのに。なんで遅刻なんかするんだ〜！！！！！！

金を財布に入れ、かばんを肩にかけ、寝癖をなおし、歯磨きをして家をでる。急いで駐輪場に向かうが、鍵を閉め忘れていることに気が付き閉めなおす。あぶないあぶない。こんなミスをしてはまた遅れてしまう！急がなければ。

家をでたのが八時二十分。俺の家から駅に行くのに最低でも十五分はかかる。完全に遅刻だ……。一生懸命ペダルをこぎ全速力で駅へ向かう。

「おそーーい！何が遅れないよ！普通に遅れているじゃない！」
奈央の説教。

「お前遅い。遅れないって言っただろ〜！ソフトクリームおごってもらうぞ！」
智也が言う。

「やったやった！ソフトクリームごちそうさん！」
恵子が喜んでいる。

俺が着いたのは八時三十三分。ぎりぎり遅刻である。三分なんて許してくれてもいいと思うんだけど。しかしこいつらがそんなことを許すはずが無い。

仕方なく俺は向こうでソフトクリームをおごるはめになった。無駄な出費だ。クソッ……。

こうして始まった遊園地での楽しい思い出作りは始まったのだが、俺にとってすごく印象に残る遊園地になるとは誰も思いもしなかったのである。

八 遊園地 その？

遊園地は駅から電車に乗って10分、そこから歩いて5分のところにある。昔ここには何回か来た事がある。まあ小学生までの話なのだが。小さい頃には奈央とも来た事があった。家が近いこともあり、親同士も仲が良い。二つの家族でよく行った事を思い出していると、奈央も同じ事を考えていたのか小さな声で「懐かしいな……」と言った。奈央も思い出していたんだ……。そう思うとなんだかうれしくなった。

「お前も思い出してたのか？」

俺が奈央に尋ねる。

「うん。俊哉君も？」

「ああ。俺も今思い出してたよ。ホント懐かしいよな……」

「だね……。あの頃はまだ子供だったよね。」
こんな会話をしていた。しかし恵子と智也には聞こえていないようだ。あいつらは二人で話している。何の話をしているかはわからないが。

遊園地についた。この遊園地は結構有名でいつもたくさんの人でにぎわっている。今日も例外ではない。今日は土曜日だ。いつもよりたくさん人がいる。

「結構人いるな。」

智也が言う。

「当たり前だろ。いつも人がいるって。」

「今日は土曜日だよ。人が居るに決まってるじゃない！」

恵子が大きな声を出す。まあ普通のことを言われると大きな声を出したくなるのもわかる。しかし恵子、さすがに声が大きすぎないか？周りの人が驚いてこっちを見ているぞ？こっちが恥ずかしい気持ちになった。ちらっと恵子の顔を見ると恵子も恥ずかしそうに顔を

赤くしている。可愛いな。顔を赤くした奈央は守ってあげたくなくなるを取り直し遊園地へ入る。チケットを買い手続きを済ませ中へと入る。

「おい。ソフトクリームおごれ。」

智也が言ってきた。クソツ……。忘れてると思ったのに。

「わかったよ。早く選べ。」

智也の選んだ味はチョコバナナ、恵子はイチゴ、奈央は抹茶、俺も抹茶にした。「同じのにするな！違う味をいっぱい楽しみたいんだ！」と智也に怒られたが、そんなこと知ったことはない。俺は抹茶が食べたかったのだ。

智也と奈央と恵子は食べ比べをしている。俺と奈央は同じ味なので別に俺は必要ない。なんだかなあ……。俺も違う味にしときゃあ良かったな……。今さらしても遅い後悔をする。

「俊哉君、抹茶ちょうだいよ！」

恵子が走って俺のアイスをパクツつと食べた。

「奈央のはもらわなかったのか？」

俺が尋ねると、

「私は俊哉君のが欲しかったの！」

といていた。なんでかと疑問には思ったが深くは考えないようにした。

「まず何に乗る？私はジェットコースターが良いな。」

恵子がジェットコースターを指差して言う。俺は正直ジェットコースターは好きではない。むしろ嫌いである。あんな怖いのに別に乗らなくても良いのではないか？そう思ってしまう。今まで生きてきて一回だけ乗ったことがある。しかしその時俺は小学1年生だったの吐き気が催してきた記憶がある。その時のことがトラウマになっている。

みんなは賛成のようだ。乗りたい乗りたい！とはしゃいでいる。しかたなく俺も乗ることにした。高校1年生にもなってジェットコー

スターが怖いなんていったら笑われるに決まっている。

「大丈夫？ ジェットコースター嫌いなんでしょ？ 無理することないよ？」

奈央が声をかけてきた。 やっぱりこいつにはかなわない。 俺のことはほとんど知っている。 奈央が知っているのは子供の時の俺なのだが、俺は子供の時の自分とさほど変わっていないと思う。 性格は少し人見知りになった程度だ。 ちなみに吐き気を催した時も奈央が横に居て心配してくれた。

その子供の時に吐き気を催したジェットコースターに俺は今乗ろうとしている。 俺は大人の階段を上るような気持ちで居た。

九 遊園地 その？

今俺は、ジェットコースターの中にいる。いろいろ思い出しながら乗っているジェットコースターの中で気持ち悪くなってきた。小学生の頃のトラウマが頭をよぎる。段々体調が優れなくなってくる。おえ……。なんだか気持ち悪い……。そんな気持ちを察したのか恵子が俺の背中をさすってくれた。

「大丈夫？ なんだか体調悪そうだよ？」

「いや！ 大丈夫だよ！ きにすんな。」

みんなに心配をかけるわけにはいかない。せつかくみんな楽しみにしていたのに。俺だけのために気分を悪くされては困るからな。

ジェットコースターの席順は俺の横に恵子、その前が智也でその横が奈央である。

ジェットコースターが動き始めた。だんだん車体が上がっていく。だんだん緊張していく。そろそろだ。気分が悪い。その時気付いた恵子が俺の手を握っていることに。それは俺の事を思ってくれているのかはわからないが、心が安らいだ。

いつのまにか下がっていく位置にいる。そろそろだな。

急激に下がった。俺はボーっとしていたので急に驚いてしまった。

顔が引きつる。声を出すわけにはいかない。怖いのがばれるのは嫌だ。顔が引きつっているのをなおそうとがんばって真顔にしようとする。俺は変な顔になっていないか心配だがそんなことを言うている余裕は無い。今はこの恐怖に耐えるだけである。

ジェットコースターが終わった。俺の顔は今、どのようになっているだろうか？ もしかすると死ぬ寸前の顔をしているかもしれないし、よだれを垂らしているかもしれない。それもわからないくらい疲労していた。

「おいトシ、何してんだ？次いくぞ！」

智也を含め俺以外の奴らはジェットコースターが大好きなようだ。俺は大嫌いなのだが。

「俊哉君いこ〜！おいてっちゃうよ〜。」

奈央が智也と一緒に言っている。俺はまだジェットコースターの近くにある椅子に座っている。まだ体に力が入らない。まあいわゆる放心状態というやつであろうか。初めてだったのでわからないが。

「俊哉君ってジェットコースター苦手なの？だったら言ってくれればよかったのに・・・。」

恵子が心配そうに言う。俺を気遣ってくれてるのか。ホントに優しいやつだ。

「バレた・・・？俺小学生の頃、これに乗ってそれからジェットコースターは苦手なんだ。」

俺は素直に打ち明けた。こいつらなら何を話しても大丈夫だと思うたから。

「そうなんだ。やっぱりね！なんか乗る前から顔色悪かったしね。」

「なんだ、気付いてたのか。」

「気付くに決まってるでしょ。いつもの俊哉君じゃなかったもん。」

「お〜〜い。何してんだ！早く行くぞ！時間がもつたいない！智也が叫んだ。今はそんな気分じゃない。今はここで休んでおきたい。それを智也に伝えると、

「わかった。じゃあ元気になったらメールくれ。俺らがここに来るわ。」

と行ってみんな行ってしまった。恵子は最後まで俺の心配をして看病するといっていたが俺が断った。みんなで遊んで欲しかったからな。

今は俺は一人。木陰のあるベンチに座って休んでいる。すると前から女子が走ってきた。よく見るとうちのクラスの女の子だ。

「朱里^{アカリ}。何でここに？」

こいつの名前は吉本朱里^{ヨシモトアカリ}。うちのクラスのあまり目立たない子。恵

子の友達だそうで俺も喋ったりする。容姿は可愛い。眼鏡はかけていないがコンタクトだといっていた気がする。恵子と違い清純な感じである。

「俊哉君こそ何でここに？」

「ああ、俺は友達と来てたんだけど体調が悪くなつてな。今休んでいるところだ。」

「ねえ……。横座つていい……。？」

「おう。」

そういえば朱里にここにいる理由を聞いていなかったな。

「なんでここにいるんだ？」

「ああ、言つてなかったね。今家族と来てるの。」

「じゃあ家族は？」

「今は妹がメリーゴーランドに乗っているのを見てるわ。私は俊哉君を見つけて走ってきたの。」

俺を見つけて走ってきたのは驚いた。どうしてだろうか？

「ねえ……。あのね？言いたい事があるの。」

朱里が口を開いた。

「ん、どした？」

「私……。俊哉君の事が好き……！」

十 遊園地 その？（前書き）

なんだか急な展開といえますか……。思い出に残る物語にしたか
つたんでこんな話もありかなあ……。なんて。
ではこれからもよろしくです。

十 遊園地 その？

一瞬何を言われたのかわからなかった。いきなりだったから……。
「え？ごめん、もう一回言ってます？」

「だから……。私は俊哉君のことが好きなの……。」
俺は何で2回も言わしてるんだろうと思った。せつかく女の子が勇気を振り絞って言うてくれたのに。俺はそこで自分が嫌いになった。
「それ本当か……？」

俺は気が動転していて何を質問していいのかもわからない。告白されたことなんて1度も無かったから気が動転しているのだ。

「嘘でこんな事言わないよ……。」
そりゃそうだ。女の子が「好き」なんて言うのはホントの告白の時ぐらいだよな。ましてや朱里は真面目な子なんだ。そんな軽い女じゃない……と思う。

俺はどう断ろうか考えていた。俺には好きな奴がいる。まだ告白してないけど。でも本当にきっぱり言うべきなのか？俺は迷っていた。
「……。」

俺は黙り込んでしまった。一番してはいけないことなのに。

「返事は……いつでもいいから……。」
朱里は走り去っていつてしまった。俺はなんて声をかけていいのかわからなかった。朱里を引き止めることが出来なかった。

俺は迎えに来てくれとメールを打った。すると5分後、3人は来てくれた。

「もう大丈夫か？まさかジェットコースターが苦手だったなんてな」
智也がニヤニヤしているように見えた。なんかまた冷やかされそう

だ。まあ気にしてないけど。

「なんか顔色良くなってきたじゃん。そろそろいける？」

恵子が手を差し伸べてきた。まあ30分も休ましてもらったんだ、なんとか楽になってきた。

「乗る前も顔色すごかったけど、終わった時はもう死んでたよね。」

「死んでた？そんなにやばかったか？」

「あれは長年見た顔の中でもベスト3だね！」

俺と奈央が会話をしていると恵子が会話に入ってきた。

「え？奈央ちゃんと俊哉君は昔から知り合いなの？」

「ん、ああ。小学6年まで近くに住んでてさ、奈央が引っ越しちまったんだけどまた帰ってきたんだって。」

「へへ。そうなんだ。」

恵子が腕を捲くりながら頷いている。そしてこちらを見ながらニヤニヤしている。

「もしかして俊哉君、ずっと奈央ちゃんのこと好きなんじゃないの？」

「こいつ！悪い顔してるぜホント！」

「バーカ、幼馴染だつての。てかお前悪い顔してるぞ？大丈夫か？病院いくか？」

「ちよ、これはワザとだつてば〜！」

恵子が俺の顔を引っ張ったりつついてりして遊んでいる。

「おひ、はめる。」

それでも俺は「おい、やめろ。」と言ったつもりなのだが、頬を引っ張られていたのでなかなかうまくいえなかった。

「そろそろ行くぞ！時間もつたいない！」

智也が不機嫌そうに言う。智也は恵子のが好きだから俺と仲良くしてるのが嫌なんだな。

「わかったわかった。じゃあいくか。」

「うん。そうね。そろそろいきましようか。」

「でもその前にお腹減っちゃったから何か食べない？お昼ごはんもマダだしさ。」

奈央がお腹をさすって言う。今は1時。そろそろいい時間帯になってきた。みんなお腹減ってくる時間帯だな。

「さんせい！私もお腹へってんだ。」

恵子が手を上げて大きな声を出す。お前はどつちなんだ。俺はそう思ったがいうのをやめてみんなの話を聞く。

「じゃあどこ行くよ。てかみんなは何が食べたいんだ？」
智也が聞く。

「私はイタリアンだね！パスタとか！」

恵子ははしゃいでいる。

「私はハンバーガーとかかな。」

奈央はハンバーガーだそうだ。

「俺は和食だ！でもこの辺には無いな。じゃあ……中華！ちゆうかあああ。」

智也は中華がいいらしい。なんか歌い始めたし。

実の俺はというと正直なんでもいい。あんまりお腹が減ってない。

さっきのジェットコースターのせいだ。

「俊哉君はなにがいいの？」

奈央が聞いてきた。なんでもいって言うわけにもいかないよな。

「俺か？俺は……俺もハンバーガーでいいわ。」

なんとなく奈央に便乗。ただ安そうだからな。さっきのソフトクリーム4個はまあまあの出費である。

「じゃあハンバーガー決定だな。」

智也が仕切る。こいつはそういう役には向いている。

「はーーーーーい。」

みんながいつせいに返事をする。気持ちの良い位の返事だった。学校でなにか言われた時にする返事とは全然違う気持ちのいい返事だった。

みんなでハンバーガーショップに向かう。俺はチーズバーガーにメロンソーダのみ。智也はチーズバーガーとフライドポテトとチキンナゲットとエビカツサンドとジンジャーエール。奈央はベーコンバーガーとアイスコーヒ。恵子はエビカツサンドとホットコーヒだ。

恵子はなんでみんな冷たい飲み物を買うのか疑問に思っていたようだ。今は11月なのだから冷たい物を飲むとお腹を壊すんだとか。俺もそうだが、今日はあまり寒くなく過ごしやすい日だ。奈央と久しぶりに会ったときのような心地のいい日。俺はそのことを思い出して空を見ながら食べていた。(いつもと変わらない空だ……。)

そう思いながら。食べたところでもう2時。しゃべりすぎてしまった。

「次どこ行く？」

智也が聞いてくる。

「やっぱりメリーゴーランドじゃない？定番でしょ！」

「私も乗りたい！久しぶりだな。」

「んじゃいくか。」

恵子の意見にみんなが同意。みんなでメリーゴーランドに向かった。

十一 遊園地 その？

メリーゴーランドについた。この遊園地のメリーゴーランドはなかなか大きくてそこそこ有名である。羽の生えた馬以外にも馬車や小人10人が担いでいる椅子などがある。小人が担ぐ椅子があるのになかなか珍しいものである。

「ねえ、何に乗る？私は小人！好きなんだよね。」

奈央は小人に乗るようである。昔から好きだもんな、小人は。

「俺は定番の馬に乗るぜ！」

智也は馬に乗るようだ。ホント定番。

「私はね〜・・・。俊哉君と馬車に乗っちゃうもんね〜！」
そういつて俺の腕に抱きついてきた。

何〜〜！俺と馬車だと？！確かに馬車は2人乗りだけど・・・。
恥ずかしいだろ！

「あ〜！ズリーぞ！俺も恵子と乗る！」

智也が悔しそうに言ってきた。ホント変わってやりてえよ・・・。

智也はこっちに向かってきている。

『そろそろ動きますので、立ち歩かないでください。』

メリーゴーランドの切符売り場のお姉さんがマイクを使って俺らのほうを向いて言った。おい智也。お前のせいで恥ずかしいだろ！

智也は渋々馬に乗った。こちらを見てうらやましそうにしている。

俺は奈央のほうをチラッと見た。奈央の顔がいつもよりこわばっているように見えた。どうしたんだる奈央。あいつメリーゴーランドは全然大丈夫のはずだし。後で聞いてみるか。

「・・・い、おーい。俊哉君聞いている？」

いつの間にか恵子が俺に話しかけていたようだ。

「ん、ああ。わりいわりい。考え事してた。で、何だ？」

「ちよつと〜！私の話聞いてよね！」

恵子はちよつと不機嫌そうな顔をしたかと思っただらすぐいつもの恵

子の顔に戻る。よかった。機嫌を戻してくれたんだな。

「私ね、今日本当に楽しかった。あんまり俊哉君とは話せなかったけど。出来ればもっと話しておきたかったな。なんて思ってるけどね。」

「ああ、ごめんな。俺がジェットコースターに乗れないの言わなかったばかりにさ。お前らも全然楽しめなかっただろ？」

「うん。俊哉君のせいじゃないよ。私が知らなかったのがいけないだよ。今日でわかったんだ。私は俊哉君のことをもっと知りたいてわかったの。」

俺は最後の言葉の意味がいまいちわからなかった。この時はまだ俺は子供だったんだ。

「いや、俺が悪いんだ。言わなかったしさ。また今度遊びに行こうな。お前らともっと俺は思い出を作りたいから。」

「うん。また一緒に遊びに行こうね。」

恵子は満面の笑みで答えた。この時の恵子の顔は本当に綺麗だった。可愛いとかじゃなく綺麗の一言であった。なんだか大人の女性というか。俺は何秒恵子の顔を見ていたのかわからない。そのぐらい恵子の笑顔は綺麗だった。

そんな話をしているとメリーゴーランドは終わっていた。降りると奈央と智也が待っていた。

「遅いぞ！何してたんだ！」

智也はそれとなく不機嫌だ。理由はわかってる。俺と恵子が一緒に馬車に乗ったからである。奈央を見ると奈央もあんまり機嫌が良くないように見える。どうしたんだろ。体調でも悪いのかな？

そのあとはいろいろ乗り物に乗ってなんか食べてたりしたらいい時間になってきた。

「私そろそろ帰らないと。今日はありがとね！楽しかったな。」
奈央が言う。本当に楽しかった。俺は今日こいつらとここにこれて本当に良かったと思った。

「ん、もう6時半か。いい時間帯だな。じゃあそろそろ帰りますか

ね。」

「もうそんな時間か。じゃあそろそろお開きだな。」
智也が言う。

「今日はホントにありがとね！私も楽しかった〜！」
恵子も楽しかったらしい。そういえばさっきそんな事言ってたな。

「んじゃあ俺は奈央を送って行くからよ。」

「んじゃあ俺は恵子を送っていくわ。」

俺は奈央、智也は恵子家まで送ることにした。智也は満面の笑みで俺に言ってきた。そりゃ嬉しいだろうよ。好きな奴なんだから。俺も奈央が好きだけど顔には出したくない。恥ずかしいから。

「じゃあな。」

みなんでお別れを言って解散。恵子と奈央の家は正反対なので2人とも違う方向に歩いていった。

俺は疑問に思っていたことを奈央に聞いてみた。

「なあ奈央、お前メリーゴランドに乗ってる時から体調でも悪かったのか？顔がこわばってたからさ。」

「だって俊哉君がケイちゃんとイチャイチャしてるんだもん。」

奈央は俺と恵子がイチャイチャしてるように見えたらしい。

「どうしてそう見えただ？」

「だってケイちゃんと馬車に乗ったから……。」

「あれは恵子が勝手に……。」

なんて言ったらいいのかわからなかった。確かに男女2人で馬車に乗ったらイチャイチャしてるように見えるかもしれない。しまった……。そんなこともわからなかったのか俺は……。

「ごめん。俺は恵子のこととはなんとも思っていない。ただ向こうが乗ってきただけなんだ。」

「言い訳はいいよ。」

奈央の冷たい声。俺は奈央を失望させてしまったのか……。そう

考えると俺は声が出せなくなっていました。そのまま俺と奈央は無言のまま歩いた。イチヨウの並木道を。

何分俺たちは無言のままに歩き続けたのだろう。俺は恵子と乗った馬車を見ている奈央の顔を想像していた。あれを見て奈央はどんな気持ちだったんだろうか。もし奈央と智也と一緒に馬車に乗っていたら俺はどんな気持ちだったんだろう。そんなことばかり考えていた。

「私んちついたから。もうここでいい。」

奈央はそれだけ言うと家に入ってしまった。俺はどうしようもない気持ちだった。俺はその時朱里に告白されたことを忘れてしまった。

俺は一人孤独の中を歩いているような気持ちで家に帰った。

遊園地：奈央の気持ち

ジェットコースター楽しかったなあ。昔から私こういうの好きだから。でも俊哉君は苦手だったっけ。乗る時もひどい顔してたから・・・。大丈夫かな？

「俊哉君、大丈夫？やっぱり乗らないほうが良かったんじゃない？」
「いや、ちよつとめまいがするだけだからきにすんな。」

全然大丈夫じゃない。私は昔からの幼馴染だからわかる。あんな顔する時の俊哉君は我慢してる時の顔だもん。みんな、ホントは大丈夫じゃないんだよ？って言いたいけど、言ったら俊哉君怒るだろうなあ・・・。頑固だし。

「わかった。じゃあ元気になったらメールくれ。俺らがここに来るわ。」

「ああ、頼むよ。ありがとな。」

「私は俊哉君の看病をする！」

「ケイちゃん・・・。もしかして俊哉君のこと・・・。」

「あいつ大丈夫かなあ。ジェットコースター苦手なんてはじめて知ったわ。」

「ホント。私も知らなかった。」

私は知っていた。でも止めれなかった。それがなんか悔しいな・・・。私しか知らなかったのに。私が俊哉君を守らないといけないうちに。

-----メリーゴーランド-----

私は小人が好きなのだ。だからいつも小人の椅子に乗っている。

「私は小人に乗るつと。」

俊哉君は何に乗るんだろ。やっぱり馬なのかな？

「私はね～～・・・。俊哉君と馬車に乗っちゃうもんね！」

ケイちゃんちゃんが俊哉君と馬車に乗ってる……。ちよつとなんかヤダな……。

メーゴーランドが動き出す。

こつちからは俊哉君と恵子ちゃんの顔が見えない……。声も聞こえない……。なんの話をしてるんだろう。ほんとに俊哉君は私のこと好きなのかな？あの夜、私に言おうとしたことは「好き」ってことなのかな？

メリーゴーランドを降りてもやっぱりなんかずっと話してる気がするな。なんか面白くない……。

――――帰り道――――

「んじゃあ俺は奈央を送っていくからよ。」

「んじゃあ俺は恵子を送っていくわ。」

6時になったから皆解散することになった。

「なあ奈央、お前メリーゴーランドに乗ってる時から体調でも悪かったのか？顔がこわばってたからさ。」

俊哉君はなにもわかってない……。なんにもわかってない……。

「だって俊哉君がケイちゃんとイチャイチャしてるんだもん。」

「どうしてそう見えただ？」

どうしてって……。あんなのどう考えてもそう見えちゃうよ……。

「だってケイちゃんと馬車に乗ったから……。」

「あれは恵子が勝手に……。」

勝手も何もそんなただの言い訳じゃない……。言い訳なんかしないですよ……。

「ごめん。俺は恵子のごとはなんとも思っていない。ただ向こうが乗ってきただけなんだ。」

「言い訳はいいよ。」

今はここに居たくない。どうしても嫌な気持ちになっちゃう。こんな気持ちになっっている自分が嫌になるから。

「私んちついたらから。もうここでいい。」

家に着いた。そそくさと家に入った。

家に入って自分の部屋に入って布団に寝転がった。

なんかこんなことで腹を立ててる自分って子供だな……。まだまだ子供なんだな。私はまだまだ子供なんだな……。なんか今日の自分嫌いだな。

そんなことを考えているといつの間にか眠っていた。遊園地の嫌なことを忘れるくらいの深い眠りに。

またみんなでいけたらいいな！

今度はダブルデートで！（笑）

なんだこのメール！ダブルデートって！こいつのメールは面白いから好きだ。

俺もこんなメール打てたらいいんだけど。
智也に返信する。

件名：no title

本文：またみんなでいけたらいいよな

ダブルデートとかふざけんな！

んじゃまた月曜日にもな

今日はまだ土曜日なのだ、すっかり日曜日だと思っていたのだが。そついや明日はすることが無いな。まあ明日考えるところか。

そんなことを思っているとまたメール。

今度は二件もメールが来ている。

From：恵子

件名：no title

本文：今日はありがとう！

こんなに楽しかったのは久しぶりだよ

俊哉君とも二人で話もできたし大大大満足！

じゃあまた月曜日に！

今回の恵子のメールはいつもより女の子らしいメールだと思った。
ってそれほどメールもしたこと無いんだけど。

件名：no title

本文：こちらこそ楽しかったよ

いい思い出になった！

んじゃまたな

んー。俺のメール何とかならないかな。とっ
と明るい感じのメールにしたほうがいいのかな？

奈央からのメール

From：奈央

件名：no title

本文：今日はみんなありがとね！

たのしかったなあ

次はどこ行こっか

ピクニックとか行きたいよね！

じゃあまた月曜日にも^o^

ほんと楽しかったよ〜〜！！

この文面を見てわかると思うが、俺だけに送信されたものではない。
今日行ったみんなに一斉送信している。メリーゴーランドのことで
怒ってるのかな。俺を避けている気がする。明日謝りに行ってみよ
うかな。

てかもう次のこと考えてるのかこいつ。まあ予定が決まる
ことは俺にとっても嬉しいから別にいいんだけど。

今回は少し明るい感じで送ってみようかな。

件名：no title

本文：おつかれ！

今日は楽しかったよな！

次はまた月曜日にでも話そうぜ

この思い出がずっと心の中に残りますように！！

……。なんか俺のメールって感じがしないけどまあいいよな。今回は明るく打てたんだ。今回はこれでよし……と。

メールを打ち終わると俺は朱里のことを考えていた。

俺には好きな子がいる。もちろん奈央なのだが。だからやっぱり断るべきなんだよな。こんな気持ちで付き合ったら向こうに悪いんだ。せつかく一生懸命になって思いを伝えてもらったんだから。こつちも真剣になつて答えなければならぬんだ。

でもなんだか朱里の悲しむ顔が思い浮かんでしまうと悲しくなるな。だからつてそんなことでもし付き合ってしまったら最後に傷つくのは絶対に朱里だ。俺はそんなことは絶対にしたくない、絶対。

俺の中で答えが決まった瞬間に急に眠くなった。時計を見ると今は八時四十五分。いつもの俺なら風呂に入ってる時刻なのだが、今日はいろいろなことが起こりすぎた。苦手なジェットコースターに乗った。朱里に告白された。奈央を嫌な気持ちにしまった。こんなことがあつて疲れない人はまずいないんじゃないか？

俺は時計で時間を見るとすぐに眠りについてしまった。子供が外から帰ってきて疲れて眠るように熟睡した。

十三 奈央の家にて

今日は日曜日だ。今は十一月一日。もう秋から冬に変わろうとしている。そういえばなんだか寒くなってきたな。コートが必要になるかもしれないな。

俺はそう思いながらタンスからコートを取り出す。黒のコートだ。それをハンガーにかけてと着替え始めた。

いつもなら智也は部活だし遊ぶこともない。だから着替える必要なんてないのでそのままであることが多いのだが今日は奈央の家に行くこうと思っっているので着替える。

着替え終わって外に出る。今は昼の一時。奈央と約束をしてるわけではないのでもしかしたら他の友達と遊んでいるかもしれない。もししたら謝ることができない。

謝るといっのは昨日奈央の機嫌を損ねてしまったから謝りにいくのだ。

外に出るとやっぱり寒いな。コートを着ていこう。そう思ってコートを取りに行く。

コートを着て歩き出す。奈央と俺の家は歩きで約十五分、自転車で約五分くらいでつく。今回は歩きで行こう。

そうだ、奈央の家に行くのだったらもちろん奈央のお母さん、お父さんに会うこともあるのだ。久々に奈央のご両親に会うのだ。何か持っていかなければ。お菓子でも持っていこうかな。そう思い俺は近くの茶菓子店に行く。お茶菓子を買って奈央の家に向かう。

家に着いた。この前送っていった時は申し訳ない気持ちだったが今はかなり緊張している。久しぶりに奈央のご両親に会うのだ。緊張しないわけが無い。

インターホンを押す。『はい、どなた？』奈央のお母さんがインターホンに出る。

『あー、奈央さんのお友達の木村俊哉です。お久しぶりです。』

『あら！俊哉君？ちょっと待ってね！』

そういえば俺の苗字は言ってなかったな。俺の苗字は木村。この際だから皆の苗字も言っておこう。智也の苗字は村上、恵子の苗字は中村、奈央の苗字は菊村である。

奈央のお母さんが玄関から出てきた。奈央のお母さんはかなり綺麗だ。もう40代だと思いが歳なんか感じさせないくらい綺麗だ。それに奈央とも似ている。奈央もそのDNAを受け継いでいるのだから。奈央も綺麗だ。

「久しぶりじゃない！奈央から話は聞いてただけだね。この辺で一人暮らししてるんでしょ？大変ねえ。」

「お久しぶりです。一人暮らしはもう慣れました。それに結構快適なもんですよ。あ、それとこれ久しぶりだったんでお茶菓子でも。」

「あら、そんなのよかったのに。でもありがとう。俊哉君大人になつたわね。偉いわ！」

「いえいえ、そんなことないですよ。これくらい普通です。」

「そう。で、今日はどうしたの？」

「俊哉お兄ちゃん！久しぶりだね！」

この声は美月だ。奈央の中二の妹である。奈央は綺麗というほうが正しいが美月は可愛いといったほうが正しい。俺は美月のことを妹のように可愛がっていた。こんな可愛い妹がいたらなんて思ったこととはしょっちゅうである。

「お、美月じゃん。久しぶりだな美月。また可愛くなってるな。」

「そんなことないよ。照れるじゃん！」

そういつて美月は走って行ってしまった。美月の照れ屋はなおっていないようだ。

「ごめんなさいね俊哉君。また恥ずかしがっちゃって。」

「いや大丈夫です。僕でもあんなこと言われたら照れちゃいますよ。」

「そうかい？あ、そういえば何の用できたんだい？」

「あ、そうですね。今日は奈央さんに謝りにきました。」

「奈央に謝りに？どうしたんだい？」

奈央のお母さんはちよつと心配そうな顔で尋ねてきた。

「実は昨日、奈央さんの機嫌を悪くしてしまつて。それを謝りにきました。」

「そんなこといいのに。別に謝りに来なくてもいいのに。」

奈央のお母さんは笑つて僕に言つてくれた。奈央のお母さんの笑顔を見てちよつと安心した。

「いえ、それに奈央さんのお母さんとお父さんにも会いたかつたので。」

「まあ、そんなこといつて。褒めても何にもでないわよ！」

そんな話をしているうちに奈央が二階から降りて来た。

「どうしたのお母さん。……俊哉君……。」

「よう。昨日は悪かつた。」

俺は素直に謝ることができた。実はテンパつて謝れないような気がしていたから一安心。

「いいわよ別にそんなこと。こんなところでもなんだし奈央の部屋でお話でもしたら？」

「ちよつと！お母さん！なんでそうなるのよ！」

「まあまあ、いいじゃない別に。さあさあ入つて俊哉君。」

俺は入つていいのか迷つたがお母さんに言われているんだから入るしかないよな。そう思つて家にお邪魔することに。まあ最初からそのつもりだつたんだが。

「おじやましまーす。」

俺は家に入る。

「こつち。」

奈央が俺に向かつて言うので俺は奈央についていく。奈央の部屋は二階の階段が上がつてすぐである。

「お邪魔します……。」

奈央の部屋に入る。奈央の部屋は女の子らしい部屋になっている。ピンクのカーペットにピンクのカーテン、クマのぬいぐるみなど女

の子らしいものであふれている。

「で、どうしたの？今日は。」

奈央はちよつと不機嫌そうに言う。やっぱり昨日のこと怒っているんだな。

「いや、昨日は俺が悪かったよ。あんなの見たら俺だって不機嫌になるよ。ほんとごめん。」

「別に……。こつちこそごめん。あんなことで機嫌悪くなって私ってまだまだ子供だね。」

奈央は笑顔で俺に向かって言った。奈央の笑顔が見れて本当によかった。俺は心の中でそう思った。

「奈央が謝る必要なんかないよ。だから謝るなよな。」

「うっん、私もあんなで機嫌悪くなったから……。。」

「大丈夫だから。奈央に謝られたら俺が悲しくなっちゃうよ。だから謝るな。な？」

俺は奈央の頭を撫でた。奈央は笑顔でうん。といつてきた。

「そつだ。奈央の家に行く途中に茶菓子を買ってきたんだ。食べようぜ。」

実は奈央の両親に渡す分と奈央と一緒に食べる分とを買っておいたのだ。

「ありがと！おいしいね！私お饅頭って大好きなんだ！」

「だから饅頭を買ったんだよ。奈央が喜ぶだろうと思って。」

「さすが俊哉君！私の好みを何でも知ってるね！」

当たり前だ。俺はお前と何年一緒にいたと思ってるんだ？お前の好みくらい知ってるつての。俺らはその後いろいろな話をした。それに奈央の家に夕食もご馳走になった。俺のために奈央のお母さんが手によりをかけて作ってくれた。奈央のお母さんは料理も上手だしいい人だ。美月とも話ができたし今日はよかった。奈央の機嫌も戻ってくれたし家に来て正解だったな。まあひとつ残念なのは奈央のお父さんが仕事で会えなかったことだけだ。

十四 放課後に

今は月曜日の放課後。

俺は下駄箱の前で人を待っている。

え？誰を待つてるんだって？

そりゃあれだよ、朱里を待つてんだよ。

俺は土曜日、智也と恵子と奈央と一緒に遊園地に行つてた時に朱里と偶然に会つて告白されたんだ。

その返事をしなければならぬから朱里を待つている。

朱里は部活はたしかやっていなかったはず。だから放課後はまっすぐ家に帰るはずなのだ。

だからそのときに返事をしなよと思うのだ。

朱里が歩いてくる。靴に履き替えるところに声をかける。

「よう、朱里。一緒に帰らないか？」

「……俊哉君……！……うん……」

なんとか一緒に帰ることができた。

でもこれ、俺は朱里と付き合えないつて言つて結構勇気があることなんだぜ？

学校から歩いて5分、いまだ俺たちは無言の状態。

何か話さなければ、何か話さなければ……と思つていたそのとき、

朱里のほうから俺に話しかけてきた。

「今日誘つたのはあのとときの返事でしょ？」

朱里にはバレていたようだ。まあそりゃそうか。普段一緒に帰らない奴が帰ろうなんて言ってくるのは普通ないもんな。

「うん、そうなんだ……」

あー、これ言わないといけないんだよなあ。結構つらいもんだよなあ……

「俺さ、他に好きな子がいるんだ。だから……朱里とは付き合えない……ごめん。」

言えた。俺は朱里に自分の思いを告げた

「うん、なんとなくわかってたから。私はフラれるだろうってね。だから謝らないで。」

朱里は笑顔で言った。朱里のこんな辛そうな笑顔は見たことが無い。無理して笑ってるんだ。

俺はそんな朱里を見て心が苦しくなった。そのとき俺は体が勝手に動いたんだ。

俺は朱里を抱きしめていた。

「どうしたの俊哉君………?」

朱里は明らかに動揺している。

「俺は朱里とは付き合えない。だから最後にひとつだけ。朱里には笑ってほしいから……。」

正直自分は最低だと思った。告白を断つといて笑ってほしい、だから抱きしめる。やってることは最低の人間だ。これじゃ朱里に悪いだろ?

「ごめん……いきなりこんなことして……。でも、あんな辛い顔した朱里を見たくなかったから……。」

朱里はこちらを見て笑顔で答えた。

「ううん。私は俊哉君の本当の気持ちが聞けて嬉しかったよ?だから謝らないでよ……。それに抱きしめられたときちよつと嬉しかった……。好きな人に抱きしめられるってこんなに嬉しいんだって思えたんだ。だから、謝らないで?」

朱里は笑顔でそういったが目には涙をためているように見えた。

俺は朱里を泣かせてしまったのだ。こんなバカな俺のせいで……。俺は謝ることしかできなかった。

その後、朱里を家まで送った後、俺は一人で悔やんでいた。

だってそうだろ?女の子を泣かせてしまったんだぜ?俺のせい……。悔やんでも悔やみきれない……。

俺はとことん自分のことが嫌いになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6083i/>

いつかの約束

2011年1月27日02時32分発行